

岡藩史を読んで学ぶこと (三)

古藤 田 太

(會員 弥生江良)

秀吉はその年も秀政の武勇に注目していた。文禄元年の朝鮮征伐に当たって、秀政を福島政則、長曾我部元親、蜂須賀家政等の部将の棟梁に任じ、帰国後は必ず一国を与え、約束した。

秀政は三千余の兵を大船十二隻に乗せ朝鮮へ、釜山沖の海戦では家臣の柴田両賀が敵船を焼き打ちする功をたてたのをはじめ、中川軍は各地に善戦した。

然しその後は思わしく運ばなかった。韓国水源城を守っていたが平凡な日が続いた。

十月二十四日「鷹狩でもするか」秀政は言い出した。遙か前方の山々や左右の小山には敵兵の潜むおそれがあった。家臣達は必死になってその危険を説いて反対したが、言い出したら引かぬ悪い癖、父上の軍功はよく知

られたものであったが、この秀政もよく似た「言い出したら聞かぬ」癖があった。

家臣の止めるのも聞かず甲冑の上に狩り装束をつけ一人馬に乗った。従兵はいずれも具足をつけ、兵器を持って従ったが、鳥を驚かせないため皆徒歩であった。

秀政は上機嫌であった。やがて秀政は先方に日本人が朝鮮兵に追いかけているのを目撃した。薪を採りに来た日本兵らしい。秀政は日本兵を救わんと走り出した。

駆けつけた馬上の人に朝鮮兵は囲むように攻撃を始めた。秀政は大刀を以て朝鮮兵の攻撃を防いでいるうち、毒吹矢が当って落馬、そのとき駆けつけた秀政の配下に追われ朝鮮兵は退散した。家臣達はどうにかして秀政を城に運び手当をしたがそのうち絶命した。

藩主・総指揮官の急死は家臣達にとって何にもまさる驚きで、家老達も秀吉公にどのような説明をするべきか、それぞれの意見が出るが、いずれも納得のゆく説明は急場のことゆえ出るものではなかったが、「秀政公が一人で番所を見回っているとき、敵の待ち伏せにあつて深手を負い、養生の甲斐もなく死去されたものである」と。

このとき文禄元年十二月六日、秀成は朝鮮の陣中で中

川家の家督となった。

翌文禄二年五月、朝鮮の役は終り秀成は帰国して三木城に入ったが、十一月突然、秀吉は三木城を召し上げた。理由は明確ではないが、秀政の死の真相が秀吉に知られたものであろう。

秀吉は三木城の代わりとして淡路須本、伊予宇和島、豊後岡の三ヶ所を内示され、秀成は豊後国を検地中の山口玄蕃の助言で豊後岡を選んだといわれる。

これまで都に近い茨城城や三木城（兵庫県三木市）に住み慣れた中川家の家臣や妻子にとつて、九州の山奥、豊後岡への転出は容易なものではなく気の重いことであつた。妻子達の中には「鬼の住む所」と噂するものもあつたという。

【表紙写真解説】

彦岳は海拔六三九メートル、山頂には彦岳神社が鎮座し、大入島を眼下に佐伯湾を展望できる。狩生の王子神社から登ると国指定天然記念物の狩生鍾乳洞や大手洗の滝がある。春は山桜と新緑が、秋は紅葉が見どころ、「彦岳夕照」が佐伯八勝のひとつ。広域林道に出ると中島子玉の歌碑が建っている。



飛狐ひこの聳そびゆる処ごうゆう豪遊を試
む。道みちを夾はさんで松杉しょうしん
白日はくじつ幽ゆうかなり。谷く暗くらうし
て巖陰がんいんに山鬼さんき語ごらい、林
深ふかうして樹梢じゆしやうに嶺猿れいえん愁うれ
う。遠帆えんぱん忽たちち雲中うんちゆうに入
りて尽つき、遙とほかなる嶼しまは
宛あたも天際てんさいに浮うかべるが
如ごとし。茅屋ぼうおくに帰かへり来きって
心こころ恍惚こうこつ、夢魂むこん猶なほ瀑泉はくせんの
頭こゝろに掛かかる。